

数年前の暮れ、寄席で落語を聴いた。その日の演目は「うどん屋」だった。……冬の夜、江戸の町を、屋台を担いでうどん屋が鍋焼きうどんを売り歩いている。が、さっぱり声がかからない。(もともと江戸っ子は蕎麦好きで、うどんは風邪で寒気がする時くらいしか食べなかったらしいのだ。)

「うどん屋さん、こっちこっち」

店の手代らしい男から、あたりをはばかるような小声で呼ばれたのは、大店の裏口に差しかかった時だった。さては、奉公人たちが主人に内緒で夜食をこっそ

り食べるのだろう。これはいい商いになる。うどん屋は、店の裏にそっと屋台を下ろし、声をひそめて聞いた。

「何人前ですかい？」「一人前」

きつと、まずは自分が食べて、うまかったら他の奉公人たちを呼ぶのだろう。うどん屋は腕によりをかけて鍋焼きうどんを作った。

Taste  
of  
the Season vol.7  
text by Noriko Morishita  
illustration by Mizue Hirano

## 鍋焼きうどんの幻

エッセイスト 森下典子

その熱々のうどんを食べるシーンが、噺家の名人芸だった。割り箸に見立てた扇子を横にくわえて2つに割る。鍋の蓋を開ける。その途端、私の目に白い湯気が確かに見えた。湯気をふうふう吹きながら、うどんを吸る。煮えた長ネギの匂いが、鼻の奥にプーンとした。お麩を口に入れた瞬間、噺家は「アツツ」と慌てた。上顎を火傷したのだ。クスクスと会場に笑いが起こった。

ずるずる、ずるずると吸る音で、うどんの太さを感じた。つゆの匂いがある。私はグーッと腹が鳴るのを感じた。噺家は、うまそうにつゆまで飲み干して見せ、「ふーっ」と一息つき、一人分の代金を払うと、「うどん屋さん」と、小声で何か言おうとする。「へい」と、声をひそめ、追加の注文かと身を乗り出すうどん屋に、手代はこう言う。

「お前さんも、風邪ひいたのかい？」

寄席が終わったのは夜10時過ぎだった。師走の街に寒風が吹いていた。さつき見た「鍋焼きうどん」の幻が、つゆの匂いが、たまらないほど空腹を駆り立てた。焼き肉やラーメンじゃダメなのだ。今夜は「鍋焼きうどん」でなくては……。隣の駅まで歩いてみたが、店はどこも閉まっていた。食べられないと思うと、空きっ腹がなおさら狂おしかった。ふと、うちの近所の商店街に、深夜ま

で開いている食堂があって、そこでうどんも出していたことを思い出し、急いで電車に乗った。やっと駅に着き、目当ての食堂に駆けつけたが、なんとシャッターが下りていた。私はその場にへたり込みそうになった。その日は定休日だったのだ。その夜、私は床に就いてからも、欲求不満のまま、「鍋焼きうどん」の幻にうなされて過ごした。

やっと本懐を遂げたのは、翌日の昼だった。蕎麦屋で念願の「鍋焼きうどん」を注文した。ぐつぐつと煮えたうどんの上に、ネギ、シイタケ、かまぼこ、お麩、ほうれん草、海老天がのっていた。幻に描いた通りの味がそこにあった。私は後にも先にも、あれほどおいしい「鍋焼きうどん」を食べたことはない。

もりした のりこ / 神奈川県生まれ。横浜市在住。日本女子大学文学部国文学科卒。「週刊朝日」の名物コラム「デキゴトロジー」のライターを経て、エッセイストとなる。主な作品に、『日は好日』『猫といっしょにだけで』（新潮文庫）、『いしいべもの』（文春文庫）など。

